

# 近代京都の景観と金閣寺

河角直美

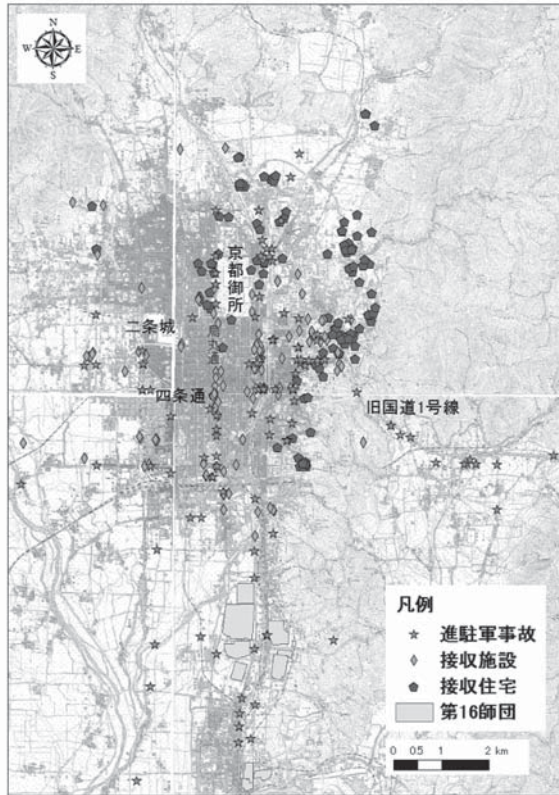
## 1. 占領期京都地図上に置いた小説『金閣寺』の地図を作るまで

地理学の立場から小説を読み解こうとするならば、やはり文章内で表現されている具体的な場所、街並みや土地の様子、季節、自然など描かれている景観に目が注がれる。そして、小説が過去を対象としている、もしくは過去に執筆された作品といった場合には、その時代の景観を可能な限り復原しつつ、小説と向き合おうとするであろう。よって、三島由紀夫の『金閣寺』についても、鹿苑寺（通称金閣寺、以後、本稿でも小説に合わせ金閣寺とする）が実在することを踏まえつつ、小説が対象とする時代の金閣寺とその周辺の景観を復原することがまず必要であると考ええる。三島由紀夫の『金閣寺』は、第二次世界大戦中から戦後の連合軍による日本占領期にかけての京都を小説の舞台としている。よってここでは、金閣寺周辺の景観を戦前から戦後にかけて時系列的に復原し、その特徴を明らかにしたい。

戦前戦後の京都の景観を知るうえで、戦前に発行された地形図、都市計画図などを参照しつつ、長谷川家住宅と京都府立総合資料館が所蔵する『京都市明細図』を活用する。『京都市明細図』は、大正末期に刊行されたと推定される、個々の建物の形状、あるいは敷地などが詳細に描画された大縮尺地図である<sup>1)</sup>。特に、京都府立総合資料館が所蔵する明細図には、火災保険地図として刊行された原図に加筆や修正、さらに着色が施され、また場合によっては原図上に更新図が貼られていることから、主に都市計画に関わる業務に用いられたと推定されている<sup>2)</sup>。また、資料館所蔵の明細図におけるこうした加筆のなかに、「進駐軍用地」や「進駐軍用住宅」、あるいはローマ字による表記などが散見され、京都の占領期に関わる情報を含む地図であることがわかっていく<sup>3)</sup>。資料館所蔵の『京都市明細図』は、京都における戦前戦後の景観変化を示す地図であり、小説『金閣寺』の景観を知るうえで貴重な情報を提供する地図であるといえる。

一方、京都府立総合資料館の所蔵する占領期に関わる資料のうち、占領軍が駐留のために接収した建物に関するものと、占領軍に関係した事故に関するものが先行研究により取り上げられ、「京都占領期地図」として地図化されている<sup>4)</sup>。こうした先行研究の地図に記載された情報と、総合資料館所蔵の明細図における描画とを地理情報システム（GIS）を活用して融合し、作成したのが第1図であった<sup>5)</sup>。

まず、小説『金閣寺』の舞台となる占領期京都の景観として、第1図から概観しておきたい。第1図より、接収施設は四条烏丸周辺や河原町三条、京都駅周辺にみられ、これらは既存のホテルや企業の事業所といった施設の入るビルディングであった。京都市の中心部が占領された様子が理解されるものの、接収された施設は市の中心部から東側に多いことを指摘できる。また、こうした企業の建物や公的な施設に加え、占領軍の家族用住宅の建設が進められ、さらに高級将校家族用住宅として一般住宅の接収が行われた。接収住宅は市の中心部にはほとんどなく、



第1図 占領軍事故と接收住宅の分布  
(赤石・瀬戸(2013)より)

堀川通以東の特に白川通，東山通，岡崎公園，御所周辺に密に存在した<sup>6)</sup>。京都の占領でありながらその分布には偏りがあり，堀川通より東側の占領の密度に対して堀川通より西側，すなわち金閣寺周辺の密度は低いと捉えることができる。では，実際はどうであったのか。上記のような特徴を踏まえつつ，金閣寺とその周辺の景観を次章以降にて確認していく。

## 2. 近世末から近代初期における金閣寺周辺の景観

本章では金閣寺とその周辺の景観とその変化について，近世末期から概観する。現在の金閣寺は，多くの観光客が訪れる京都市内屈指の観光地の一つである。建築物としての美しさだけでなく，金箔で覆われていることにインパクトがある。もちろんこの金箔は，放火事件後，再建された際に施されたものである。

近世末期の旅日記には，次のような記述がある。「金閣はけたれとも猶あとあり」(清河八郎『西遊草』(1855))<sup>7)</sup>，「三重共に四壁の板天井其外ことごとく金箔を置けるといへど，今は破はて少しく残れり」(萩原貞宅『都紀行』(1864))<sup>8)</sup>。こうした記述から，焼失する前の金閣寺は，金箔をほとんど喪失した状態で，今とは全く異なる趣の寺であった。長崎大学図書館で公開さ



第2図 明治中期における金閣寺周辺の概観  
 (明治25年仮製地形図より作製)

れている明治初期の写真からも、金箔の剥がれた金閣寺の様子を知ることができる<sup>9)</sup>。

さらに、第2図は、明治中期に発行された仮製図をもとに作製した金閣寺周辺の概観図である。当時、御土居が残存し、紙屋川（天神川）の流路も現在と異なっており、そして金閣寺背後の左大文字山の植生は主にアカマツであった。金閣寺の周辺には大北山村や小北山村といった集落が散見される。市街地の碁盤目に由来する整然とした区画に対し、明治中期の金閣寺周辺は、田畑や茶畑の広がる近郊農村であった<sup>10)</sup>。大正末期の景観を描画すると考えられる長谷川家住宅所蔵の『京都市明細図』、1927（昭和2）年に撮影されたとされる空中写真<sup>11)</sup>からも、金閣寺周辺が農村であった様子を確認することができる。かつて金閣寺は、田園風景のなかにある寺院であった。

ところが、6年後、1931（昭和6）年発行の旧版地形図を概観すると、金閣寺の周辺では整然とした土地区画が見られるようになり、少しずつ建物が増えていることがわかる。現在、金閣寺は西大路通とその周辺に広がる比較的整った区画の果てに存在するものの、それは昭和初期以降に形成された景観であった。次章では、こうした金閣寺周辺、並びに近代京都における都市近郊の開発について述べていく。

### 3. 郊外住宅地の開発と金閣寺周辺

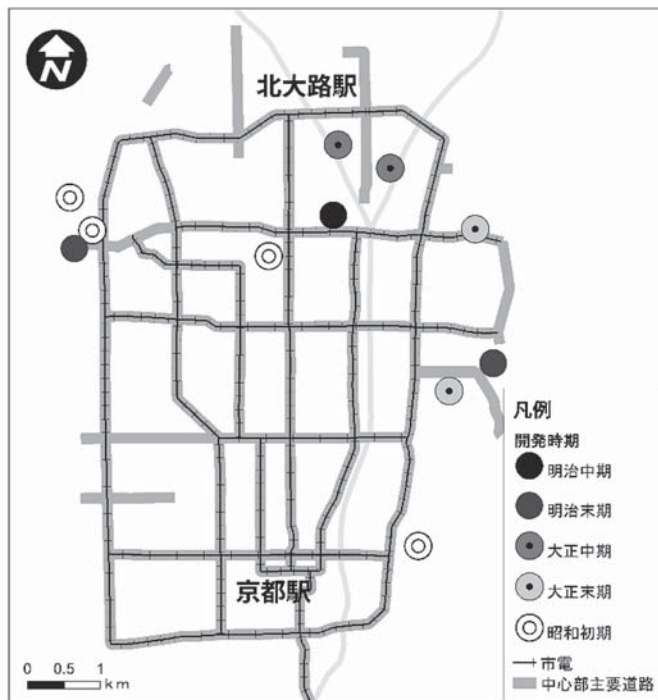
#### (1) 京都における郊外住宅地の開発

京都の都市史について、「…平安京の碁盤の目とはほとんど縁のない、多くが近代以降に造られた碁盤の目の中に生活しており、それを実現させたのが、土地区画整理であったといえる…」と中川が指摘しているように<sup>12)</sup>、現在の京都市にみられる街路網は、近代以降に形成されたといえる。

明治後期以降行われた、上水道の整備、第二琵琶湖疎水の建設、市内主要道路の拡築と市営電気軌道の敷設という京都市三大事業ののち、外周幹線道路の新設とその周辺地域における土地区画整理事業が進められるなか、京都市の市街地周辺の景観は大きく変化した。大正期、人口の都市への流入に伴って隣接町村を編入した京都市は、市街地周辺部の市街化に備えた街路整備事業を計画し、それとともに土地区画整理地区を指定したのである<sup>13)</sup>。この事業決定は1926（大正15）年のことであった。

こうした都市計画事業としての土地区画整理が進められた一方、郊外に住宅を建て都心に通勤をするという生活スタイルが、京都においても見られるようになっていた<sup>14)</sup>。石田・大菅を参考に、郊外住宅地の開発時期について示したのが第3図である<sup>15)</sup>。開発の時期は地域によって異なり、南禅寺旧境内地の別荘地は1911（明治44）年以降、高野川周辺は1919（大正8）年頃、賀茂川東岸の下鴨下河原町は1921（大正10）年頃、下鴨地区は1925（大正14）年頃、北白川は1925（大正14）年頃、銀閣寺周辺は1935（昭和10）年頃に宅地の開発が始まっている。京都における郊外住宅地の開発は民間資本による場合も多く、こうした郊外の住宅地に居住したのは、学者や医師、実業家、画家といった人々であったという<sup>16)</sup>。

ところで、大阪や東京における鉄道の敷設と一体となった宅地開発に対し、京都の宅地開発は、鉄道の敷設や道路の拡幅を伴わない形で始まっている点に特徴があると指摘されている<sup>17)</sup>。第3図には、1945（昭和20）年頃の市電路線を示しているが、都市計画事業による外周幹線道路の建設、あるいは市電の開通前に開発された宅地もいくつかある。さらに、近郊住宅地の開発



第3図 主要な郊外住宅地の開発時期と1945年頃の市電と中心部主要道路  
(石田(2003)・大菅(2000)より作製)

は概ね市の東側で多いことも指摘できる。市の西側の地域では、例えば衣笠園が1912（明治45）年に、小松原北町が1930（昭和5）年以前に開発されている。近代以降の京都市における市街地の拡大は市の東部を中心に進んでいた。

## （2）金閣寺周辺の開発

金閣寺周辺を含む市の西側の開発は、民間資本による開発の前に、旧都市計画法による土地区画整理事業に伴って進んだ。金閣寺周辺の開発は、1930（昭和5）年の土地区画整理組合設立申請と、翌1931（昭和6）年にそれが認可されたことにより始まる<sup>18)</sup>。同様に、金閣寺の東側地区では1929（昭和4）年～1939（昭和9）年、金閣寺の南側地区では1934（昭和9）～1935（昭和10）年にかけて事業が認可されている<sup>19)</sup>。そして、この地域を貫く外周幹線道路である西大路通（北大路～白梅町間）は、市電の開通とともに1935（昭和10）～1936（昭和11）年にかけて開通した<sup>20)</sup>。米軍の撮影した空中写真（1946（昭和21）年）、1953（昭和28）年京都市都市計画基本図などによれば、かつての農村景観は失われ、整然とした区画が確認される。こうした土地区画整理以後、金閣寺周辺の土地では民間資本による宅地の分譲が行われ、徐々に住宅も増えていった<sup>21)</sup>。

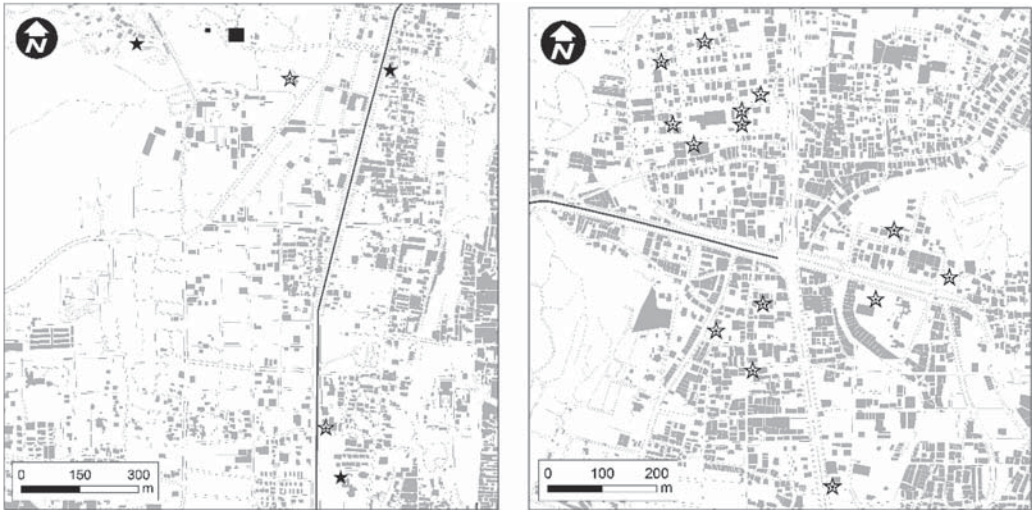
現在、整然とした街並みを通り抜けた先に金閣寺は存在するが、それは昭和初期以降の都市計画によって形成された景観であった。ただし、明治末期から民間資本によって別荘地や住宅地が順次開発された市の東側に対し、金閣寺周辺の開発時期とそのプロセスは異なるものであった。

## 4. 接収と金閣寺界隈

### （1）近代建築と接収

さて、先述したような郊外住宅地には、多くの洋風の近代建築が建設された。それらのうち、いくつかの建築は現在でも確認することができる。大正期以降、都心の住宅密集から離れ、郊外の田園風景の中にあった郊外住宅地の近代建築は、その後、受難の時を迎える。それが第二次世界大戦後の占領期であった。企業の建物や公的な施設に加え、一般住宅の接収が行われたことを先に述べた。接収住宅を含む、占領期京都に関して、筆者らは、以前、歴史学・地理学・建築学の分野で集いワークショップを行った。その際に同席いただいた玉田浩之によれば、個人の住宅を接収する際の条件として、「構造が健全であること、ガス・電気・水道・暖房設備が良好であること、最小限六室を有し、そのうち寝室が二つ以上あること」が挙げられている<sup>22)</sup>。当時の京都において、この要求に答えられるような住宅が分布していたのは、郊外住宅地であった。すなわち、南禅寺周辺の別荘地をはじめ、北白川や下鴨周辺、日吉山麓などに分布した近代建築であった。一方、中心部を占めていた町家はこうした条件に適さず、接収の対象から外されたと考えられる。近代化にともない開発された比較的敷地の広い郊外住宅地は、占領軍が入りやすい空間であった。

第3章で指摘したように、郊外住宅地は市の東側・北側に多く存在していた。明細図（総合資料館所蔵）の建物の分布状況からも東側と西側の違いを確認したい。第4図から、東側の接



第4図 1950年頃の金閣寺周辺(左)および白川周辺(右)の建物分布星印は接收施設と接收建物  
 (『京都市明細図』(京都府立総合資料館所蔵)より作製、一部建物のほか敷地も含む)

収住宅周辺では庭付き一戸建の住宅が散見される一方、建物が密集し始めていることがわかる。それに対し、西側の金閣寺周辺でも区画整理により整然とした街区が形成されているものの、建物は未だ疎らである。すなわち、開発の時期の違いから、東側と西側で接收可能な建物の数に違いがあったといえる。西側は新しい開発地域であり、接收の対象となるような住宅も少なかったことから、占領から遠い存在となっていたと捉えられよう。比較的早い時期に郊外住宅地の開発が進んでいた市の東側や北側の近代建築が接收の対象とされ、接收住宅は東側から北側に多く分布するという結果となった。

## (2) 空白とみられた金閣寺界隈の謎

第1章で指摘した京都の占領の偏りは、接收の対象となる施設や住宅が堀川通より東側、あるいは北側に集中していたためであった。京都はそもそも左京を中心に東側・北側から開発されてきた<sup>23)</sup>。その延長線上に占領が重ねられるのは当然であるといえる。金閣寺周辺は、第1図のように占領の中核から距離のある、比較的遠い地域となっていた。ただし、数は少ないものの接收された住宅、施設は存在する。開発時期は遅れたものの、金閣寺周辺でも昭和初期には土地区画整理がはじまり、西大路通のような幹線道路も一部開通していた。建物の数は少なくとも、接收の対象となるような住宅や施設が分布した。そこで、金閣寺周辺の占領について、よりミクロなスケールで概観し、改めて京都の占領を検討したい。

西川論文の「占領期の金閣寺界隈地図」を参照してほしい。『金閣寺』に登場する場所について、特に金閣寺周辺を中心に示した図である。金閣寺周辺に接收住宅や施設が点在していることがわかる。特に、金閣寺の西や東、あるいは南側に接收された住宅・施設が点在し、実は金閣寺と占領はかなり近接していた。そして、金閣寺の東南、現在のヨゼフ整肢園付近に接收された施設があり、そこは「CIC」となっている。それは府の文書類はもとより、『京都市明細図』(総

合資料館所蔵)にも明確に記載されている。明細図によれば、CICの周辺には「HQS 1st-CIC Region」, 「office」, 「yard」, 「Teness court」, 「Motor Pool」と記載されている。さらに、明細図や公的な文書類には記録されていないが、金閣寺の南に秘密事務所があったことを西川は指摘する<sup>24)</sup>。すなわち、金閣寺とその周辺は、連合軍の諜報活動の場であったと考えることができるのである<sup>25)</sup>。同様に資料には記録されていないが、桜谷文庫にはクルーガー図書館が一時入り、立命館大学にはかまぼこ兵舎があった可能性があるという<sup>26)</sup>。

京都の占領期間中、継続して「占領期の金閣寺界限地図」のような占領状態であったとは考えられないものの、少なくとも金閣寺周辺は連合軍にとって単なる観光地ではなかった。開発の時期は遅れていたものの、縦横に整備された区画と北大路から延伸された西大路通は、ジープで移動する占領軍にとって都合のよい空間であっただろう。東側の密集に対し未だ建物の数が少なかったことは日本人と接触する機会も少なく、また新規の住民が画家といったインテリ層の人々であったことは、諜報活動に適していた可能性がある<sup>27)</sup>。

以上のように、金閣寺とその周辺における景観を確認したうえで、小説『金閣寺』を読むと、その描画に対する理解の仕方も異なってくるであろう。一方、小説を理解するために描画された景観を復原することで、景観の詳細な実態を把握できる可能性がある。小説『金閣寺』で描かれた京都の景観は、近代京都の都市史や戦前戦後の京都を知るうえで、一つの情報を提供してくるものといえよう。具体的には、近代以降の京都における市街地の拡大について、その開発時期の微妙な違いの意味をより慎重に捉えることの必要性である。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 『京都市明細図』は、日本火災聯合保険京都支部が1927(昭和2)年7月より前に作製したもので、火災保険図と考えられている。2010年末に京都府立総合資料館にてその所在が明らかにされ、2014年には京都市の長谷川家住宅でも発見された。資料館所蔵の明細図には、個別建物の用途や、一般住宅には緑、商店・企業・金融機関には赤、工場には青、そして遊郭には紫などの着色が施されている。こうした概要については、福島幸宏・赤石直美・瀬戸寿一・矢野桂司「『京都市明細図』を読む－いくつかの素材の提示として－」、野口祐子編『メディアに描かれた京都の様態に関する学際的研究 平成23年度京都府立大学地域貢献型特別研究(ACR)研究成果報告書』2012, pp.53-61が参考となる。
- 2) 赤石直美・瀬戸寿一・福島幸宏「『京都市明細図』の記載内容に関する一考察」、立命館地理学 26, 2014, pp.73-89。山近博義「京都市明細図の作製および利用過程に関する一考察」、大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門 64 (1), 2015, pp.25-42 などにおいて、描画の特徴や作成の経緯が議論されている。
- 3) 赤石直美・瀬戸寿一「『京都市明細図』GISデータベースと占領期地図のデジタル化」、アリーナ 15 別冊, 2013, pp.20-25。
- 4) 西川祐子「古都の占領—占領期研究序論」、アリーナ 10, 2009, pp.143-162。鈴木良ゼミナール編『占領下の京都』, 文理閣, 1991 など。一方、長は、連合軍側が作成した地図から、京都の占領について議論している。長志珠絵「“CITY MAP OF KYOTO”を「読む」—占領期研究序論—」、アリーナ 15 別冊, 2013, pp.36-45。
- 5) 京都府立総合資料館が所蔵する占領関係の資料に記述された事故発生現場、接収施設、接収された一般住宅の位置情報を基に、京都府立総合資料館所蔵の『京都市明細図』の描画を参考にし、GISソフトウェア ESRI 社の ArcMap10 上で、事故現場・接収施設・接収住宅のベクタデータ (point データ) を作成した。詳細な作成の経緯については、前掲 3 を参照。
- 6) 玉田浩之「占領軍による接収住宅と接収施設地図の建築史的分析」、アリーナ 15 別冊, 2013, pp.26

- 35。なお、玉田氏を含め行ったワークショップの成果は、「特集 占領期京都を考える」アリーナ15別冊に所収されている。
- 7) 駒 敏郎・村井康彦・森谷尅久『史料 京都見聞記 第三巻 紀行Ⅲ』, 法蔵館, 1991, p.323。
  - 8) 前掲7), pp.408-409。
  - 9) 長崎大学図書館 「幕末・明治期日本古写真超高精細画像データベース」において、金閣寺の古写真を閲覧することが可能である。  
URL : <http://sepia.lb.nagasaki-u.ac.jp/zoom/jp/record.php?id=1688>  
(2016年8月22日閲覧)
  - 10) 京都市『京都の歴史8』, 学芸書林, 1975, pp.422-429。
  - 11) 京都大学が所蔵する写真であり, 1927(昭和2)年の撮影とされる。
  - 12) 中川理「近代都市計画事業の実相」高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』, 昭和堂, 2003, pp.152-161。
  - 13) 前掲12)
  - 14) 石田潤一郎「郊外の発見」, 高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』, 昭和堂, 2003, pp.186-197。
  - 15) 前掲12), 大菅直「京都における戦前の宅地開発に関する研究」, 京都工芸繊維大学大学院工学研究科造形工学専攻, 平成11年度修士論文, 2000。石田潤一郎・中川理・橋爪紳也「明治後期以降の京都市および周辺地域における住宅地形成事業について—近代日本の市街地形成に関する考察(その1)」, 昭和63年度日本建築学会近畿支部研究報告集, 1988, pp.909-912。
  - 16) 前掲14)
  - 17) 前掲14)
  - 18) 鶴田佳子・佐藤圭二「近代都市計画初期における京都市の市街地開発に関する研究—1919年都市計画法第13条認可土地区画整理を中心として」, 日本建築学会系計画系論文集458, 1994, pp.99-108。前掲15) 大菅論文。
  - 19) 前景18) 論文。
  - 20) 京都市『京都の歴史8』, 学芸書林, 1975, pp.460-461。
  - 21) 前掲15) 大菅論文。
  - 22) 前掲6)
  - 23) 片平博文「旧版地形図を読む」矢野桂司・中谷友樹・磯田弦編『バーチャル京都—過去・現在・未来への旅』ナカニシヤ出版, 2007, pp.50-53。
  - 24) 西川論文参照
  - 25) 西川論文参照
  - 26) 西川論文参照
  - 27) 西川論文参照